辛亥革命期桂林におけるベトナム人独立運動家

吉　川　次　郎

はじめに

辛亥革命直前の時期に桂林で発行されていた『南風報』は同盟会広西支部の機関誌であったが，その第１期と第２期（1911年２－３月発行）に，「越南（ベトナム）亡国始末談」という記事が掲載されている。「南国恨人述」とあるとおり，ベトナム出身者の声を伝えるものであるが，記事掲載にいたったいきさつについては冒頭，次のように記されている。

「この原稿は，ベトナム亡国の志士某の手になるものである。亡国の痛みをかかえ，〔植民地からの〕恢復の志をいだいて国事に奔走したものの，数年を重ねて成果なく，フランスの暴虐に耐えかねて我が国に来たるやひたすら学問に潜心，傷ついた身の養生に努めたのちに，さらに我が国の英傑を訪ね，将来支援を求めるときのために備えようと考えた。その苦心はいかばかりであろうか。北風は凛冽，寒さが骨身に染みる夜にポツンと灯した明りと炭火のそばで，フランスとベトナムの関係をめぐるいきさつを自ら記したのである。記者はよろこんでこれを載せようと思う。読者のみなさんがもし心打たれることがあれば，すみやかに自立しさらに人を立てるための方途を探っていただきたい」[1]。

この「記者」が誰であるのかは明らかではない[2]が，雑誌を主催者する中国人によるベトナム人へのまなざしが，中国人読者に対する意識も含んだかたちでひとまず見て取れよう。そこには亡

1　南国恨人述「越南亡国始末談」『南風報』第１期，1911年２月。

2　「記者」の手がかりとしては，後述するように第２期に引き続き掲載された「越南亡国始末談」の「按」（コメント）の最後に「逖誌」とある。なお，『南風報』の前身である『南報』第２－３号に掲載された「韓国三十年史」（英人麦根斯著）にも「逖」署名で多くのコメントがなされている。筆者はこの「記者」が『南風報』の主筆であった趙正平であると考えている。趙は倫理としての「仁」を重視しており，「自立しさらに人を立てる」ことが「仁」そのものであるとして，「仁齋」の名を用いることにもなったのだという（鄭逸梅編著『南社叢談』上海人民出版社，1981年，261頁）。

国のベトナム，それを庇護する中国，同じ亡国の道を歩まぬように努力すべしと諭される啓蒙の対象としての中国人読者という図式的関係が成り立つ。とりわけ三つ目の意図から，『南風報』は前身の『南報』に引き続き雑誌に「国民の声」欄を設けており，「越南亡国始末談」のほかにも，たとえば潘佩珠による「越南志士之悲惨結局」（第６期）などを掲載していた。

ところで，本文の「南国恨人」による記述内容そのものは，ベトナム近代化の初期段階における実際の動きに即したものとなっている。たとえば，ベトナムにおける近代的学知や教育の成立をたどる次のようなくだりである。

「日露戦争の警報が伝わるや，東アジアの局面の変化をフランス人はもはや隠すことができなくなった。各国の新書や新聞がしだいに国内に輸入され，知識層は最近の新思想を発信するようになった。同じ志をもった人々とつながり，それぞれ自分のお金を出しあって，新聞社を立ち上げ，新式の学校をつくり，各省には演説場・農業局・商業局・地方自治会・保険局が同時にできていった。また，国中の女性にも競うように紡績工場や女学校をつくる者があった。フランス人は，初めはこうした動きを恐れたが，私たちの行動が理にかなったものだったので，干渉するすべなく，どうすることもできなかった。さらに時を経て，海外に留学すべしと主張する者が現れ，フランスにパスポートの発行を願い出たが，フランスがこれを許さないとみるや，相たずさえて密かに国門を潜りぬけていった。こうして出て行った者は数百人を下らない」[3]。

ここでは，日露戦争の衝撃に始まり，西洋近代の成果というべき新書・新学の流行，ハノイの東京（ドンキン）義塾に代表される国内の啓蒙改革，そして東遊運動など，20世紀初頭のベトナム史の一連の重要エピソードが述べられ，ベトナムの近代化における日本の影響にもしっかり言及されている。ただ，「新書」の多くが中国の洋務･変法運動のなかから生まれて来た書籍やあるいは明治期日本に留学した中国人留学生による翻訳書であったことを考えれば，むしろ日本を取り込んだ中国近代の漢字文化圏が大きな役割を果たしたともいえ，上に述べたような中国とベトナムをめぐる図式をより深い近代の文明史的位相において更新し補強する意味合いを帯びている。

さて，「越南亡国始末談」が語り終えられた後にも，筆名「逖」による按語が寄せられているが，そこにはさらに直接的なやりとりが見出される。

「南国恨人が自ら述べる亡国傷心の歴史は以上で終わりである。〔中略〕私は言った。〔中略〕いわんや君たちとはさらに同文･同族の関係にあり，君たちの故国とはまさに私たちの故国ではないか。南国恨人は，その通りです，我々はひたすら耐えながらあなた方を待っているのです，と語った」[4]。

3　前掲「越南亡国始末談（続第一期）」『南風報』第２期，1911年３月。
4　同上。

匿名のベトナム人の書き手とその批評者である中国人の関係性は，記事の末尾でこれ以上ないほどに明確となった。また，そのすぐ後に「付録」として清仏戦争に際してベトナムで戦った黒旗軍の劉永福による「討法蘭西檄文（光緒九年四月十三日）」が掲載されていることも象徴的な意味を持っている。植民地化の波が押し寄せる当時の東アジアにあって，ベトナムの独立を回復するという喫緊の課題を成し遂げるための方途として，20世紀以降の局面に即した新しい両国の関係を作り上げるのではなく，むしろ伝統的な宗属関係を再現しようという発想がそこにはみられる。この段階の趨勢として，また当時の中国とベトナムの力関係から不自然ではないとも考えられるが，一方で，いわばそれぞれのナショナリズムの勃興期にあって，はたしてこの図式が揺らぐことはないのだろうか。その実際の状況にさらに迫るためには，「南国恨人」という筆名のもとに伏せられているこの声の主の周辺を探り，そこに秘められた別の声が響いていた可能性を想像してみなければならない。

Ⅰ　桂林のベトナム人を取り巻く環境：辛亥革命直前の広西における軍国社会と教育

ベトナム人の独立運動家はどのようにして桂林に至ることになったのか，そこにはさまざまな要因が考えられる。桂林は中国の中央から見れば南方の「辺省」ともいうべき広西の省都であるが，一方で北部ベトナムとは国境を接しており，ベトナムの独立運動家にとっても，また中国の革命家にとっても，自らの生存のための後背地を互いに保証していたといえよう。ただ，こうした有利な地理的条件のほかにも，広西にはベトナム人独立運動家を誘引する重要な背景があった。それはフランス植民地の勢力圏に対抗するなかで培われてきた近代化，なかでも「軍国民主義」と呼ばれる思想の伝播であり，その具現化としての各種教育機関の整備であった。

広西における近代化の動きは，洋務運動期から変法運動を経て深化してきたが，20世紀に入り清朝のいわゆる「新政」が始まるとさらに加速した。とりわけ，1905年の科挙の廃止にともなう各種学校の新規開設には目を見張るものがあった。当時，広西省の外国教習として招かれていた一人で，南寧講武学堂の教官をしていた太田資事[5]は広西の教育事情を『読売新聞』紙上で次のように紹介している。

「両三年以前より急激なる進歩を以て各種の教育機関を設備せり。即ち，桂林府には師範学堂・農学堂・高等学堂・実業学堂を始め無数の専門学校あり。龍州庁には法政学堂・測量学堂・陸軍

5　防衛省防衛研究所および外務省外交史料館所蔵の資料によると，太田は茨城県出身で，陸軍歩兵特務曹長。当初，四川省の成都武備学堂に派遣され（「JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C06083871100，明治36年坤「貳大日記８月」（防衛省防衛研究所）」），後に南寧の陸軍講武堂に勤務した（「JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B02130227800，清国傭聘本邦人名表 明治42年12～43年５月調査（政 -16）（外務省外交史料館）」）。

講武学堂・実業学堂・女子学堂あり。其他，省内各府州には大抵数個の新学校を設立し，成績また良好也」[6]。

省都桂林にさまざまな新式の学校がつくられたのは理解できるとして，この記事に龍州のことが書かれている点は目をひく。龍州庁は1791年に設置され，太平府に属していたが，一見辺境であるこの地に新式学校が林立するにあたっても，やはり国境を挟んで目に見えるかたちでフランス植民地がそこにあるという現実が影響していた。

ベトナムの存在が広西の近代化，そして軍事化の大きな推進力になった。こうして新しい教育への熱意がみなぎるなかで，省都桂林にも新軍の士官を養成する機関として1907年に陸軍小学堂が，1909年には陸軍幹部学堂が開学した。清末に至って，広西では省都の南寧への移転が準備されていたが(龍州の陸軍講武学堂も1909年に南寧へ移転している)，それでも桂林はいまだ広西における行政の中心地であった。ところで，陸軍幹部学堂・陸軍小学堂は直接的には清朝中央の軍制改革によって生まれたものだが，その創設は広西においてより重い意味を持った。19世紀中葉の太平天国の乱以降，幾度もの争乱を経験し，また上述のとおりベトナムのフランス植民地権力とせめぎ合う地理的環境にあって，広西は軍人が絶えず政治社会をリードする「軍国社会」であり[7]，これらの学校はその後の広西の人材を輩出することとなる。これら二つの学校の運営に力があったのが，中華民国建国後の護国戦争で一躍名をはせることになる湖南省出身の軍人蔡鍔である。

蔡は日本時代の1902年に「軍国民篇」[8]を著し，帰国後は広西各地で「軍国民主義」の実現に注力していた。蔡が広西における軍事教育の目的として語ったとされる内容は，次のようなものである。

「一，中国の独立自由を求めて，少なくとも一つの帝国主義国には勝利しなければならない。二，この目的を達するためには，全国が一致しなければならない。三，広西は全国を把握するための枢軸とならねばならず，このことを成し遂げるために，新しい人材と密接に結びつく必要がある」[9]。

そこではおそらく日露戦争に勝利して帝国主義国の仲間入りを果たした日本が想起されているが，同時に広西においては「勝利」すべき相手は何をおいてもフランスであり，そうした目標は

6　「広西の近状」『読売新聞』1909年８月21日朝刊。なお，引用文中の句読点は筆者による。
7　朱浤源『従変乱到軍省：広西的初期現代化1860-1937』中央研究院近代史研究所，1995年，５ - ６頁。
8　『新民叢報』第１号（1902年２月８日），第３号（同年３月10日），第７号（同年５月８日），第11号（同年７月５日）の「兵事」欄に「奮翮生」の署名で断続的に発表されている。
9　蔡端編『蔡鍔集』文史資料出版社，1982年，31頁。

抗仏独立を志すベトナム人独立運動家ともシンクロするものとなろう[10]。蔡は当時，開明的な巡撫と目されていた張鳴岐に呼ばれて桂林に着任，兵備処総弁を皮切りに省都の陸軍の責任者として辣腕をふるった。一方，これらの学校の教官たちの大半は日本の陸軍士官学校の卒業生であり，留学先日本で燃え上がった中国革命の機運をそのまま学校に持ち込んでいた。同盟会の活動は半ば公然と行われ，雲南省の革命派の中心人物であった李根源は当時の広西について「当時，人材の豊富さでは極まっていた」[11]と述べている。本稿で広西の地域ネットワークというとき，こうして糾合されていった新軍軍人と革命党員をおもな構成要素とする人や組織のつながりを意識している。

1910年に同盟会広西支部が正式に組織されたとき，陸軍幹部学堂・陸軍小学堂からも多くの学生がリクルートされた。陸軍小学堂の第三期生で，後に新桂系の将軍として広西に君臨した李宗仁は，1909年から11年にかけての陸軍小学堂の状況について，次のように回想している。

「陸軍小学は創立当初からすでに革命党人の巣窟であった。そこは清朝の陸軍の基層幹部を訓練する機関ではあったが，校内では普段から「忠君」といった類の話が持ちだされることはほとんどなかった。あったとしても，それは遠路はるばる公務の視察にやってきた役人をごまかすために口にしたまでである。同盟会支部が成立した後は，我が校の革命の雰囲気はますます濃厚になり，広西同盟会の活動の中心となった。会の幹部は陸小の近くに部屋を借りて「軍事指針社」を立ち上げ，もっぱら陸小の学生から同志を吸収した。彼らが選んだ対象はもちろん成績優秀で血気盛んな青年たちであった。こうして彼らは私を同盟会に吸い寄せたのである」[12]。

ここで，言及されている「軍事指針社」とは正確には「軍国指南社」のことであろう。軍国指南社は1910年当時，広西の軍や地方政府関係の人材を広く集めて，５月より桂林で軍事情報専門誌『広西軍国指南』を発行していた。この『広西軍国指南』こそは，後の『南報』，さらに『南風報』へと引き継がれる内容を持つものであった[13]。

一方の陸軍幹部学堂はどうであったか。先の李宗仁の回想では，「王孝縝（勇公）・何遂・尹昌衡・耿毅・冷遹といった同盟会の成員はいずれも極めて活発であった」というが，何遂は陸軍幹部学堂の教育について述べている。

10　蔡鍔は広西と同じくフランス植民地と対峙する雲南の留日学生が発行していた『雲南』雑誌に，ベトナム独立運動の指導者潘佩珠（巣南子）の姿を詠んだ詩を寄せている（撃椎生「雑感十首」『雲南』第10号，1907年11月，131頁）。

11　李根源『雪生年録』文海出版社，32頁。

12　李宗仁口述・唐徳剛撰写『李宗仁回憶録』上，広西人民出版社，1980年，53頁。

13　彭継良『広西新聞事業史（1897～1949）』広西人民出版社，1998年，49頁および64頁。

「幹部学堂の第二期生を募集したとき，耿毅と尹昌衡が主に募集の仕事を担った。耿毅の活動によって，この期に入学した新入生の大多数は清朝の統治に対して不満で革命志向を持つ人々であり，幹部学堂の革命気分はかなり濃厚であった。私は当時参謀処籌略科の科長の職務のほかに幹部学堂の教官も兼任していた。幹部学堂には二十人以上の同盟会会員がいたが，分部長の楊明遠はじつに目配りのきく人間で，毎回会を開くごとにあらかじめ私に知らせ，なおかつ学生をしっかり集めているのだった。私たちは一緒に加盟式を執り行ったこともあった」[14]。

ある日，何遂は授業の折に学生をひきつれて運動場に行き，洪秀全の事績を引いて広西人の地域ナショナリズムを刺激しつつ，革命を鼓吹する演説を行ったことがあった。このとき，学生たちを天橋から飛び降りさせて排満革命への覚悟を問い，72名の学生はみな天橋から飛び降りたという。ところで，見逃せないのは，耿毅がこのエピソードに触れて，「そのなかには阮焦斗という一人の安南人がいたが，やはり我々同盟会の同志であった」[15]と記している点である。軍国民主義と革命という濃厚な時代の空気を吸ったベトナム人独立運動家がここに姿を現している。

Ⅱ　桂林におけるベトナムの独立運動家たち：広西地域ネットワークによる支援

鄧搏鵬『越南義烈史』[16]はベトナム独立運動に従事し非命に倒れた多くの人物の足跡をたどったものだが，そこには桂林に渡った人物が複数記録されている。例えば，「阮君徳功，阮君式唐合伝」にある二人は，いずれも日仏協約による東遊運動壊滅後に中国に渡ったが，それぞれの桂林行きのいきさつは以下のようであった。

「広州でヨーロッパの書物を買いまた借り，法律政治経済の学の神髄を研鑽一年，かたわら北京官話を練習して，中華の陸軍学校の入学に備えた。華語を身につけた。留日中に友となった中国人蔡松坡君が，桂林軍官学校の幹部になっている。君はわが志を蔡君に陳べ，紹介されて陸軍の連帯に入り，華人に混って一年余，およそ軍人の要務・操典・戦術から，労苦忍耐の試練に及ぶまで，みな実地に習得した」[17]。

「上海に潜んで中国語を学び，南音北音を習得した。広西の陸軍幹部学校の生徒募集に，中国人

14　何遂「辛亥革命親歴紀実」『辛亥革命回憶録』第１集，中華書局，1961年，468頁。
15　耿毅「辛亥革命時期的広西」『近代史資料』科学出版社，1958年４期，95頁。
16　鄧搏鵬『越南義烈史』振亜社，1918年。日本語版に，鄧搏鵬（後藤均平訳）『越南義烈史：抗仏独立運動の死の記録』（刀水書房，1993年）がある。
17　同上44頁（中国中山大学所蔵本，訳文は日本語版106頁より引用）。

になりすまして合格。二年有余で卒業し，広西人ということで中隊長になった」[18]。

いずれにも共通するのは，日本を放逐に近いかたちで離れた後，広州や上海といった大都市で中国語（場合によっては広東語も）の習得に努めるとともに，広西の陸軍幹部学堂で軍事を学ぶという明確な意思をもっていた点である。阮徳功（中国名は黄仲茂）については，蔡鍔による紹介があったことも述べられている。

ところで，前節Ⅰにその名を見出した阮焦斗であるが，筆者は以前，「阮伯卓「汗漫遊記」（1919年４月-1920年５月）について」[19]という一文で紹介したことがある。そのなかで，阮焦斗はまたの名を阮伯卓（1881-1945）といい，クアンナム省出身で後にベトナムの有名な総合雑誌『南方雑誌』において漢文版主筆を務めたことに触れた。ベトナムの人物辞典の項目には，「1906年丙午の年，挙人に及第する。維新・東遊運動の呼びかけに応じて，日本に留学した。日本政府がフランスと結んでベトナム人学生を解散させ，我らの愛国者たちを追放した後，氏は中国へ赴いた」[20]とあり，当時にあってはまさに東遊運動後のベトナム独立運動の潮流に身を置く一人であった。

阮伯卓の手になる「汗漫遊記」[21]はその半生をたどった自伝的な紀行文と呼ぶべきものだったが，後に小説「万里逋逃記」の主人公武漢生の遍歴にも投影されている。「万里逋逃記」は，浙江省杭州で発行されていた『兵事雑誌』に，1925年から翌年にかけて掲載された連載小説である。物語の内容は，ベトナムを出発して，タイ・香港・日本・中国を経て再びベトナムにもどる青年の遍歴が19世紀末から20世紀初頭にかけての東アジア世界の近代化の趨勢を背景に描いたもので，東アジアの近代を形作った地域ネットワークとナショナリズムの相補的な関係，具体的にはベトナム独立運動と中国革命との交錯がさまざまな層で表現されている。また，物語の後半において主人公武漢生の流浪の目的は明確に「軍事」を学ぶことに収斂していくが，それは近代性の象徴としての軍隊と，軍事体制を軸に成立する社会のその先に独立した国民国家ベトナムを見据えたものであった[22]。当時の思考枠組みの一つとして，「軍国民主義」に集約される思想こそ，ベトナムの若者が植民地のくびきを脱し，国境を越えた流浪の旅を続ける強力な吸引力として働いたとみる。

ベトナム独立運動が志向するものと軍国民主義社会の建設を目指す広西ならびに桂林の社会思

18　同上46頁（中国中山大学所蔵本，訳文は日本語版110頁より引用）。

19　拙稿「阮伯卓「汗漫遊記」（1919年４月-1920年５月）について」『国際教養学部論叢』（中京大学国際教養学部）第７巻第２号，2015年３月。

20　Nguyễn Q. Thắng – Nguyễn Bá Thế, Từ Điển Nhân Vật Lịch Sử Việt Nam, Nhà Xuất Bản Văn Hóa, 1999, p.482. なお，同辞典は「この時期〔中国滞在時〕に阮伯卓はひそかに裏切って，フランスの手先となった」と記述している。

21　『南風雑誌』第22期（1919年４月）から第35期（1920年５月）にかけて掲載。

22　以上は，拙論「物語世界から見た近代ベトナムと中国・日本―浙江『兵事雑誌』（一九一四－一九二六）所収の小説作品について―」『歴史の理論と教育』第133・134合併号，2010年で論じた。

潮とは親和性をもち，その点においてベトナムのナショナリズムと中国の地域主義的ネットワークの協力関係は確かなものとなる。冒頭に述べたような伝統的な中国とベトナムの関係への追慕もプラスにはたらき，広西の地理的条件もそれを後押しすることになった。実際のところ，中国側の援助というかたちでベトナムの独立運動家たちに多くの便宜が図られたのである。その一端を「汗漫遊記」における阮伯卓の桂林行きのくだり[23]からみていきたい。

阮伯卓が桂林に赴くことになる直接のきっかけは，上海の酒楼で広西の高級将校である劉という直隷出身の人物に出会ったためである。劉氏は阮伯卓の連れであるベトナム人元君（阮泰抜であることが推測される）に日本で一度会う機会があったらしく，「君は一昨年に東京で某学校の寄宿生だったでしょう。皆さんが出国し留学したその志については，私は友人から詳しいいきさつを聞いています。君はあの学校を卒業したのですか。なぜさらに上の学校に進まないのですか。ここにいて何をしているのですか」と声をかけ，元君の方でも日本を離れて以来の顛末と上海での生活状況を日本語で語った。三者ともに日本への留学経験があり，いわば「軍事」をきっかけに日本が結節点となって，ベトナムと中国とりわけ広西とがつながったかたちだが，劉氏は二人に桂林行きを勧める。

その理由を劉氏は次のように語った。

「中国の各地方は発音が異なり，一つの省内であってもそれぞれの土地の発音を当局者は区別することができません。いま，みなさんはどこかの省籍を名乗ったうえで学校を探して受験し，官費を受けて入学すればいいのです。在学中は授業だけに重きを置いておけば，それ以外のことは問題視されません。〔中略〕私は桂林で官の仕事をしていますが，同僚の中にもいい人間が多い。もし私のいうことを聞いてくれるなら，私はみなさんが桂林の学校に入って学べるようにとりはからおうと思います。たとえ官費を受けることがかなわなくても，私たちで工面することもできます。広西には太平府思陵県というところがありますが，その地は貴国と隣り合っていて，発音は違っても声調はかなり似通っています。みなさんは思陵籍だとみなせばいいのです」[24]。

この回想からは当時のベトナムと中国の人的ネットワークが交錯する実際の状況が浮かび上がってくる。劉氏は直ちに電報で桂林での留学手続きを取ってくれたばかりか，阮伯卓と阮泰抜に広西銀票120両や公文，紹介状などを手渡し，自身は北京へ向かったのだった。

上海から桂林への道のりは遠く，まず海路で香港へ向かい，香港から汽船で梧州へ，さらに梧

23　阮伯卓の桂林行きについては，前掲「汗漫遊記」のうち，第10章（『南風雑誌』第30期，1919年12月）と第11章（同第31-32期，1920年１－２月）にわたって描かれている。以下，基本的にこれらを参照し，比較的大きな引用についてのみ頁数を記す。

24　同上「汗漫遊記」『南風雑誌』第30期，215頁。

州から民間の船で漓江をさかのぼって桂林にいたるルートであった。その行程にはだいたい二十日以上一ヶ月未満もの日数を要したという。

ようやくの思いでたどり着いた桂林で阮伯卓と同行の阮泰抜の受け入れにあたったのが蔡鍔で，二人への対応はきわめて親切だった。蔡鍔は速成の幹部学堂よりもむしろ北京の陸軍大学や欧米への派遣留学など，その後の発展が見込める陸軍小学堂への入学を薦めたが，それでも元の希望通りに二人を陸軍幹部学堂へ入学させた。

劉氏の紹介があったとはいえ，二人は規則として入学試験も受けなければならなかった。試験内容は，漢文による論述と算術，代数の三科目であった。阮伯卓は漢文の試験問題「国民の国に対する義務論」については完璧であったが，代数などはからきしだめであった。それでも合格した理由として，阮伯卓は中国の入学試験が漢文重視であった点を挙げている。一方の阮泰抜は「日本ですでに三年間の教育を受けていた」こともあって数学を得意としており，答案は完璧であった。こうして二人は最終的には合格し，めでたく官費生となる。

入学以降の生活にも大変なものがあった。文人から軍人への変身に努力し，苦手な数学を克服するために深夜まで勉強したという。阮泰抜の助けもあった。一方，言葉の壁を乗り越えることについては，阮伯卓は次のように振り返っている。

「また，私は南京・上海を遊歴していた折りに，中国の普通話をある程度学ぶことができていた。この普通話は学堂においてはとりわけ有効で，同級生たちと語り合い，質問することができた。まさに〔荘子のいう〕『無用の用』というものを知ったわけで，流浪落魄の時代はまた私たちの入学時代でもあったのだ」[25]。

上海から桂林入りの過程，そして桂林の幹部学堂での学習の日々をつづったこのあたりの記述は，単に個人の履歴の域を超えて，近代東アジアの大きな人的･知的ネットワークに裏打ちされたものであることがうかがえる。そこには，中国の軍人である劉氏や蔡鍔の援助のもとにあってこそ成り立つベトナム・ナショナリズム形成の動きがあり，亡命学生たちが長い道のりを実際にたどることで想像される共同体（ベネディクト・アンダーソン）が存在した。また，阮伯卓が「国民の国に対する義務論」という多分に時代的特徴を帯びた試験問題に漢文で完璧に解答したこと，幹部学堂が日本の学校システムにほぼ準拠していたために日本で一定期間教育を受けていた阮泰抜が試験を苦にしなかったこと，そして蔡鍔が曲がり角に来つつあった日本式速成教育よりもむしろ北京の陸軍大学への進学や欧米への派遣留学といった提案をしたこと，これらは阮伯卓らのベトナム出国以来の流浪が，「新書」や「新学」を媒介にした漢字文化圏における新たな学びのスタイルとその変遷に正しく沿うものであったことを示している。このプロセスにおいて，冒頭の

25　同上「汗漫遊記」『南風雑誌』第31期，16頁。

「南国恨人」と記者「逖」の象徴する中国とベトナムの関係はゆるぎないものとしてあった。

Ⅲ　ベトナム・ナショナリズムと広西地域ネットワークの摩擦と反発

漢文を駆使する知識人である阮伯卓にとって，中国に対する文化的な共感はきわめて深く，とりわけそれは中国の歴史への感慨というかたちで表現される。しかも，それは必ずしもベトナムと切り離されてあるものではない。「汗漫遊記」で桂林が景勝の地であることを説明する際には，かつて使節として北京に赴いた阮方亭の「使燕奏草」を引用している[26]が，そこには中国とベトナムの伝統的な一体感があふれている。

ただ同時に，阮伯卓がようやく桂林に足を踏み入れたときの感想は，同じく中国の古都である南京を訪れたときのものとは異なっていたとも述べられている。

「南京と桂林はいずれも私の懐古の情に触れるものであった。しかし，南京に遊んだとき私の心のなかにはとりもなおさず中国歴代王朝の興亡に対する感慨があったが，桂林のときはそれに加えて心のなかに我が国〔ベトナム〕千年の盛衰に対する感慨があったのである。それはなぜかといえば，昔の桂林城はたんに北国〔中国〕が南の我が国に侵攻する根拠地であったのみならず，中国の歴史においても有名な都市であるからだ」[27]。

このように伝統文化になずむ者にとっては，ベトナムと中国との一体感とともに想起される歴史的な抵抗感が存在することも念頭に置く必要があろう。

ベトナム人独立運動家たちの桂林における学生および軍人としての生活は，同時にベトナム人であることを秘匿する暮らしでもあった。その理由の一つは，彼ら自身が中国籍を偽って官費を取得していることがあったが，何よりベトナムの独立運動家の動向を警戒するフランス植民地政府の目が光っている恐れもあった。一方，中国側の公的な立場としても，1907年の日仏協約によって事実上日本留学推進の東遊運動が挫折したいきさつとも共通するが，植民地からの亡命者であるベトナム人に公然と軍事教育を施すことは，フランスとの外交関係に齟齬をきたすと考えられた。桂林のベトナム人学生たちには周囲の中国人学生とは異なる有形無形のプレッシャーがかけられていたと思われる。

「汗漫遊記」はそんな状況を変えたあるエピソードを伝えている。「桂林の家庭」という表題の

26 「汗漫遊記」の引用部分は，阮方亭『如燕訳程奏草』の「臨桂山水」（黄権才輯『古代越南使節旅桂詩文輯覧』広西師範大学出版社，2015年，492-493頁参照）とほぼ同じで，紹介されている名勝地にそれぞれ割り注をいれて，阮伯卓自身の体験談などを書き込んでいる。阮方亭とは阮文超（1799-1867，あるいは1872）のことで，道光二十九年（1849年）に副使として中国へ赴き，翌年帰国した（同上，467頁）。

27 前掲「汗漫遊記」『南風雑誌』第31期，13頁。

もとに語られる，桂林の文昌門外に住むベトナム人との出会いである。

「ある日，衛兵がやってきて私に告げるには，「営門の外に中年の婦人が一人立っていて，安南（ベトナム）人だといい，諸君と面会させて欲しいそうです」。私は「君は誤解している。私たちは安南人ではない。どうして安南の婦人と知り合いなものか」と返事した。そうしてとりあえず衛兵に頼んで立ち去ってもらった。翌々日，某衛兵がまたもやってきて，「安南の婦人が門の外で諸君を待っています。これで三日になりますよ」，と言う。私はそこで元君〔阮泰抜〕に伝えた。「どこかの婦人が我々のことを待っているそうだ。そんなにまで真剣なのなら，むしろ一度会ってみて，きちんと断ろうじゃないか。そうすれば，兵営の将校に疑われなくてすむから」。とうとう私たち二人は出て行って婦人に会った」[28]。

婦人は阮伯卓に南音（ベトナム語）で話しかけるが，阮伯卓はひたすら華語（中国語）で答え，自分たちがあくまで中国人であると言い張った。その婦人は，「ただ，みなさんが安南人だと認め，安南語を話してくれたら，〔ベトナムを離れて〕三十年あまりを経た私に再び故国の人の顔を見，故国の人の声を聴かせてくれさえしたら，私は死んでも悔いはありません」と切に訴えるのだった。これに対し阮伯卓は心動かされるもののベトナム人であることは頑なに否認していたが，阮泰抜にたしなめられ，ついにベトナム人である事実を明かすことになる。そこから，阮伯卓たちと婦人との交流が始まるのだった。

週末になると友人を訪ね，あるいはそれぞれの家に帰っていく中国人学生たちのなかで孤独を感じていた阮伯卓と阮泰抜は，婦人の家庭に招かれて異国に暮らす寂しさを紛らわせるようになった。ただ，そんな彼女の口から語られたのは，ベトナムと中国の近代史に横たわる壮絶な個人体験であった。

この婦人は，西暦1884年，ベトナムのドンキン，バクニン省に暮らしていたという。

「私の本籍がどこであるかは，いまはもう覚えていません。ただ，私の父が知県であったこと，私は小さい頃毎朝たべものを省城の市場で買っていたことは覚えています。私が十七歳のとき，清軍が自宅の近くに駐屯していました。彼らが毎日のように街を行進するのをみていると，私も慣れっこになってすっかり安心し，おびえることなど全くありませんでした。ある日，母が私に湖で洗濯をするように言いました。私は幼い弟を連れていきました。弟はまだ七八歳で，湖の岸に立って落ち葉を拾っては水面に投げ入れて遊んでいました。私が洗濯に没頭していると，ふいに弟が叫ぶのです，「お姉ちゃん，大刀翁が来るよ！」，と。清軍は普段からいろんな店や家屋に

28　同上「汗漫遊記」『南風雑誌』第32期，1920年２月，47-48頁。

入って食べ物を徴発していましたが，そうしたときには軍刀を提げていて，従わない者がいると刀で脅して誰も逆らえなかったので，私たちはいつも彼らを「大刀翁」と呼んでいたのです。家にいるときなど，私もこのことばで弟を怖がらせたものでした。弟の叫び声が終わらないうちに，彼らはどかどかとやってきて，私をつかまえて岸にあげました。弟は顔色がさっと変わり，そのまま固まったように地面に倒れ，泣き叫ぶことさえできませんでした。私は一人何とかしてきりぬけて弟を抱きかかえようとしましたが，彼らに羽交い締めにされて手足を動かすこともできず，縛り上げられた後，彼らは私を竹の箱に入れて担いで行ってしまったのです。このとき，私は目の前が真っ暗になって，二度と弟の姿を見ることができませんでした。しばらくの間，弟が「お姉ちゃん，お姉ちゃん」と呼ぶ声だけが聴こえていました。ああ，「お姉ちゃん，お姉ちゃん」。この最も悲惨で苦しみに満ちた声に，私の腸は切り裂かれ，心は痛むのです。その日じゅう，私が天地にも響けとばかりに母や弟を想って泣き叫んだ声のほかに，いつまでも私の耳にあったのはただ弟の呼び声でした。いいえ，その日だけではありません。いまに至っても，私が独りでいるとき，深夜静かに物思いにふけるとき，はっきりと弟の呼び声が聞こえるのです，「お姉ちゃん，お姉ちゃん」，と。むごいものです，清軍は。ひどいものです，清軍は。私の彼らに対する恨みは骨身に刻まれ，いまだ忘れたことがありません」[29]。

1884年から翌85年にかけての清仏戦争は，帝国主義国フランスと伝統的な宗主国である中国とのあいだでベトナムの宗主権をめぐって争われた戦いであり，清末の中国においては敗北の屈辱とともに，伝統的な中華世界への追憶や中国とベトナムの連帯の意味においてしばしば振り返られた。冒頭，「越南亡国始末談」の末尾に，黒旗軍の劉永福による「討法蘭西檄文」が付されていたことはすでに述べた。とりわけフランスに対抗しつつ中国南方の地域ナショナリズムを強化する過程では，劉永福のほかにもたとえば鎮南関でフランス軍を破った広西の英雄馮子材や彼を助けた蘇元春の事跡も取り上げられることが多かった。だが，ここでの記述は中国史の文脈における連帯の記憶にむしろ冷水を浴びせるものであるといえよう。

婦人の語るところによれば，清軍はフランス軍との戦いに敗れると，ベトナム女性を拉致し財貨を略奪して帰ったが，それは彼女一人にとどまらなかったという。龍州に連れていかれた後は何度も売り飛ばされたが，やがて陳という年上だが心の優しい下級士官と知り合い，後妻として連れ添うことになった。その夫との間に生まれた娘は十九になるが，母国を忘れがたいために娘にはベトナム語を教え，夜中に二人で語り合っているのだという。

その後，ベトナム人学生二人に娘の慧娘を加えた心温まる交流の様子が描かれ，さらに阮伯卓の卒業に合わせて娘と結婚させようとしたり，母娘でベトナムへの帰還を決行したり（これまで

29　同上，48-49頁。

の妻の働きに感謝していた陳老人は黙認するも未遂に終わる）といったエピソードが語られるが，最後は慧娘が民軍の蜂起に乗じた卑劣な暴力によって殺害されたという消息を辛亥革命後に人づてに伝えられるところで，桂林での日々の物語は幕を閉じる。

「汗漫遊記」の「桂林の家庭」は，桂林に暮らすベトナム人の日常生活や人間関係を描きつつ，背景に悲惨な歴史が刻印されたナショナリズムの陰影を伝えている。これまで述べてきたように，ベトナム・ナショナリズムは基本的に広西の地域ネットワークの支援のもとにあり，かつ両者はそれぞれの目的に向かって相補的でもあるが，完全に一致するものではなかった。むしろ近接しているからこそ，ときには摩擦や強い反発が湛えられていたことが想像される。

おわりに

本稿はおもに阮伯卓「汗漫遊記」を取り上げつつ，清末辛亥革命期の桂林におけるベトナム人独立運動家の姿をみていくなかで，背景にあるベトナム・ナショナリズムと広西地域ネットワークの関わり方においては，「軍国民主義」を背景にした支援･協力関係のほかに，あまり表面化しない摩擦・反発の側面が存在することを論じた。それが歴史の表面にあらわれてこない理由は，しかしさまざまであると思う。

筆者は前掲「阮伯卓「汗漫遊記」（1919年４月 -1920年５月）について」のなかで，1919-20年にかけてベトナムで発表された紀行文「汗漫遊記」と1925-26年にかけて中国の浙江省で連載された小説「万里逋逃記」の異同に触れ，前者の内容を大幅に取り入れた後者に主人公の桂林行きのエピソードがなく，代わりに山東省の青州へ赴く設定になっていることを指摘し（ちなみに，劉氏に相当する役割の楊際春という将校が登場する点で両者はパラレルである），その理由としてベトナムと中国という二つのナショナリズムのあいだで軋轢が生じる懸念があったのではないかという感触を示唆しておいた。確かに「万里逋逃記」連載中の浙江において亡命ベトナム人活動家たちは掲載誌である『兵事雑誌』の編集部門ともども当地の地方軍当局に支えられており，現在進行形で中国の地域ネットワークとの関係を維持する必要があったのである。一方の「汗漫遊記」はそうした中国とのつながりからは切り離されており，ベトナム婦人の悲劇についてもある意味で忌憚なく記述することが可能であった。もっとも，そこに何らのバイアスもかかっていないと考えるのもおそらく妥当ではない。それは，「汗漫遊記」がフランス植民地下のベトナムにおいて，フランスと協調しつつベトナム・ナショナリズムの養成につとめる『南風雑誌』に掲載されていた点を踏まえなければならないからである。

冒頭で取り上げた匿名の「南国恨人」について現時点で特定することはできないが，伏せられたさまざまな事象や思いは多くの場合，フランスと中国という二つの力が引き合う微妙なバランスの上で表現されている。清末辛亥革命期の桂林におけるベトナム人独立運動家たちは，そうし

た均衡点を探ることを通してより明確な輪郭を持ち，深みを増す存在である。